

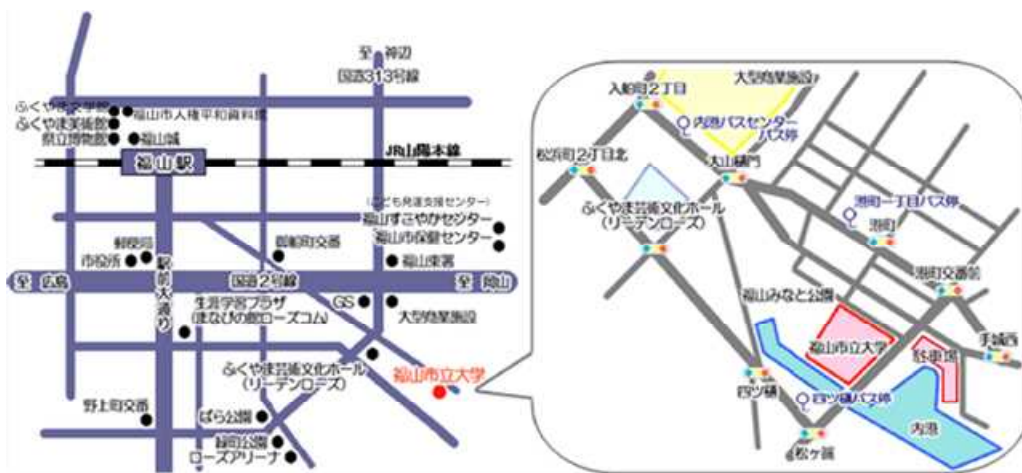
日本 18 世紀学会第 36 回全国大会  
プログラム【改訂版】  
報告要項

2014 年 6 月 21 日（土）、22 日（日）

福山市立大学  
〒721-0964 広島県福山市港町 2-19-1

## 第 36 回大会プログラム

### <福山市立大学へのアクセス>



\* 会場は港町キャンパスです。

〒721-0964 広島県福山市港町二丁目 19 番 1 号 TEL : 084-999-1111  
(最寄り駅) JR 福山駅

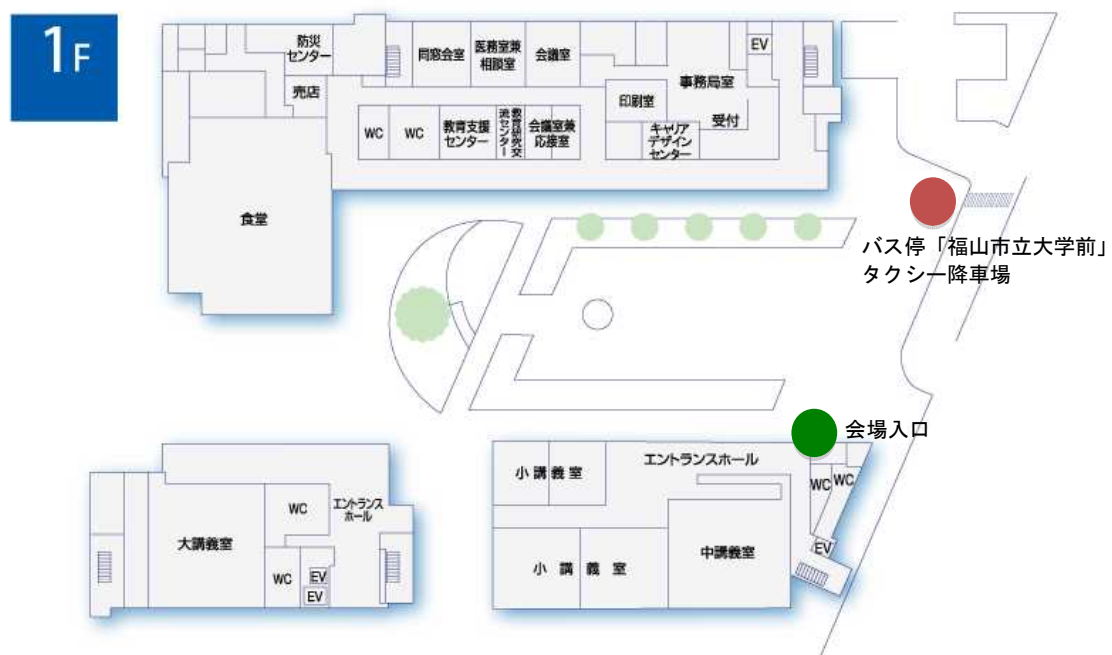
#### (JR 福山駅まで)

- 飛行機でお越しの場合  
広島空港—————(高速バス)—————福山駅(所要時間:約1時間)  
岡山空港——(リムジンバス)——岡山駅——(山陽本線)——福山駅(約80分)
- 新幹線でお越しの場合  
東京駅—————「のぞみ」—————福山駅(約3.5時間)

#### (JR 福山駅から)

- バスでお越しの場合  
JR 福山駅南口前のバスターミナル 2 番乗り場より約 10 分。  
「福山市立大学前」にて下車、または「港町一丁目」にて下車後徒歩 2 分。  
<http://www.fcu.ac.jp/access/index.html>
- タクシーでお越しの場合  
JR 福山駅南口前のタクシー乗り場より約 10 分。

<キャンパス（建物）内配置図>



\* 発表会場：1F 中講義室（上図右下）

\* レクチャー・コンサート会場・懇親会会場：鞆シーサイドホテル  
（会場へは送迎バスで移動します）

## 第1日 6月21日(土)

発表会場：福山市立大学 港町キャンパス 研究棟 1階 中講義室 A

### 9:00 受け付け開始

### 9:30-9:40 開会挨拶

### 自由論題報告

#### 9:40-10:30 自由論題報告(1)

「想像、反省、発見 –Ch.ヴォルフの哲学における技術の位置づけをめぐる–」

大熊 洋行 (東京大学大学院)

司会：福田 喜一郎 (鎌倉女子大学)

#### 共通論題(1) 「18世紀の海の道」

コーディネーター：高橋 博巳 (金城学院大学)

司会：堀田 誠三 (福山市立大学)、高橋 博巳 (金城学院大学)、

#### 10:30-10:50 趣旨説明

堀田 誠三 (福山市立大学)、高橋 博巳 (金城学院大学)

#### 10:50-11:20 第1報告

「ヘルダー『旅日記』(1769)とバルト海」

嶋田 洋一郎 (九州大学)

#### 11:20-11:30 質疑応答

#### 11:30-12:30 昼食

昼食会場：研究棟 1階 小講義室 D

**12:30-13:00 第2報告**

「韓国と日本におけるカトリック教受容の比較」  
JUNG Byungseol (ソウル大学)

**13:00-13:30 第3報告**

「前帝国主義」の日本における「渡海」言説  
KIM Shiduck (ソウル大学)

**13:30-14:00 第4報告**

「琉球国使節渡来の残したもの」  
横山 學 (ノートルダム清心女子大学)

**14:00-14:10 コーヒー・ブレイク (質問書回収)**

**14:10-14:40 討論**

**15:15-15:45 福山市立大学から鞆へ移動 (貸切バス)**

**16:30-17:30 レクチャー・コンサート:**

「17～18世紀の邦楽音楽」

会場： 鞆シーサイドホテル (〒720-0201 広島県福山市鞆町鞆 555、TEL:084-983-5111)

演奏： 占部三龍氏 (尺八)

福山市出身。尺八を加藤名山、沢井三山、横山勝也の各師に師事。地唄三味線を三輪堤一師に師事。NHK 邦楽技能者育成会第 20 期に入会。2003 年、外務省国際交流基金の派遣によりアメリカ及び中米 3 か国(ハイチ、ジャマイカ、スリナム)にて演奏。その他アメリカ、スイス、スペイン、韓国、中国、ブルガリアなど世界各地で演奏。

岡田明子氏 (琴)

福山市出身。琴、三絃を鳥山繁美、八島興作の両師に師事。箏曲宮城社大師範。1998 年、ロシア・フィルハーモニック弦楽四重奏団演奏会にてアレキサンダー・シュスティン(ヴァイオリン)と共演。2000 年、国民文化祭ひろしま邦楽の祭典 オープニングにて「春の海」演奏。2011、13 年にブルガリアにて和楽器紹介海外公演に出演。

福田歌寿子氏 (琴)

福山市出身。琴、三絃を神囀歌菜子(生田流筑紫会)、金沢歌光の両師に師事。2003 年、外務省国際交流基金の派遣によりアメリカ及び中米 3 か国(ハイチ、ジャマイカ、スリナム)にて演奏。2007 年、ハワイにて「日本とハワイ親善コンサート」出演。現在、生田流筑紫会大師範、琴アンサンブル「アポロン」主宰。

光成歌能子氏 (琴)

福山市出身。琴を沢井忠夫・沢井一恵両師に師事。生田流箏曲大師範。2003年、外務省国際交流基金の派遣によりアメリカ及び中米3か国(ハイチ、ジャマイカ、スリナム)にて演奏。2007年、ハワイにて「日本とハワイ親善コンサート」出演。子弟の教授のかたわら全国で演奏活動を展開。

曲目：

六段の調	作曲	八橋検校(1614～1685)
尺八古典本曲 手向	作曲	不明
螺鈿	作曲	沢井忠夫(1937～1997)
夕顔	作曲	菊岡検校(1792～1847)
春の海	作曲	宮城道雄(1894～1956)

**18:00-20:00 懇親会**

会場： 鞆シーサイドホテル (〒720-0201 広島県福山市鞆町鞆 555、TEL:084-983-5111)

会費： 6,000 円

**20:15-20:45 ホテルより福山駅前へ移動 (貸切バス)**

## 第2日 6月22日(日)

発表会場：福山市立大学 港町キャンパス 研究棟 1階 中講義室 A

### 10:00 受け付け開始

自由論題報告

### 10:10-11:00 自由論題報告(2)

「ギャラント様式と対位法 –18世紀前半におけるその分類の可否をめぐって–」

松原 薫(東京大学大学院)

司会：松田 聡(大分大学)

### 共通論題(2) 「啓蒙とフィクション」

コーディネーター兼司会：斉藤 渉(東京大学)

### 11:00-11:20 趣旨説明

斉藤 渉(東京大学)

### 11:20-12:00 第1報告

「フィクション概念をめぐる最近の理論的言説について」

久保 昭博(関西学院大学)

### 12:00-13:00 昼食および総会

昼食・総会会場：研究棟 1階 中講義室 A

### 13:00-13:40 第2報告

「ゴルドーニ作品における「戦争」」

大崎 さやの(東京大学)、

### 13:40-14:20 第3報告

「古典確率論の描く人間像と哲学的フィクションの関係」

隠岐 さや香(広島大学)

**14:20-15:00 第4報告**

「名誉革命とフィクション：ダニエル・デフォーの場合」

武田 将明（東京大学）

**15:00-15:20 コーヒー・ブレイク（質問書回収）**

**15:20-16:00 討論**

**16:00-16:05 閉会挨拶**



\*大会参加費として **500 円**（ただし学生は**無料**）、非会員の方は **1,000 円**をいただいております。ご了承ください。

\***お弁当**をご希望の方はお申し込みください。

両日とも、大学周辺に飲食店、コンビニエンスストアがありますが、お弁当をご用意いたします。日曜日は、お昼休みに総会がありますので、出席を予定されている方はお弁当をお申し込みください。

**お弁当代：1,000 円（税込、お茶付）**

\*大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。ご利用を希望される方は、出欠はがきにその旨を記入下さい。大会校事務担当者が個別に打ち合わせをいたします。

\*大会への出欠は同封の葉書で **5月30日（金）** までにお知らせください。



## 自由論題報告

会場 福山市立大学 港町キャンパス 研究棟 1階 中講義室 A

### 想像、反省、発見

#### －Ch.ヴォルフの哲学における技術の位置づけをめぐって－

大熊 洋行  
(東京大学大学院)

一般に美学という学科の祖はバウムガルテン(1714–1762)に帰せられる。それは美学という語の生みの親である点で正しい。しかし彼の美学はヴォルフ(1679–1754)の影響抜きには語れない。近年じっさい S.Buchenau の *The Founding of Aesthetics in the German Enlightenment* (2013)等、始まりとしてのヴォルフの思考に焦点を当てる論考も現れている。とはいえそれが美学の準備に留まる以上、格別な重視は必要ないという見方も可能であろう。しかし美学というひとつの学科に固定されていないという事実が、彼の思考をより広い射程のもと、現在の美学の営みを逆照射する際の拠点とすることを可能にしてもいる。

本発表はヴォルフの著作中、彼の哲学全体の構想を提示する『叙説』(1728)で示される枠組みを軸に、現在の美学の基礎概念のひとつでもある技術の位置づけを検討する。その際とくに技術に関わる認識能力の働きに重点をおく。

その理由は第一に技術の一般的性格を取り出し、認識能力の働きに基づく方法論に焦点を当てる彼自身の記述に即しているからである。当時のドイツでは、技術に関して自由学芸と通常の技術を区別し、前者を上位におくのが通例だった。対してヴォルフは区別に従う一方、序列化には従わず、農業等にも視野を広げて技術の一般的形式と方法論を取り出すことを試みたのである。

第二に後世への影響があげられる。ヴォルフを始点として所謂学校哲学を通じカント(1724–1804)に到るまで、技術に関わる認識能力の働きについての議論が展開された。こうした能力の働きの基本構成は次の通りである。想像は可能世界論を背景に、たんなる模像ではない表象となる。順次生み出される表象は系列化され、比較される。こうした働きの中で対象の構成に関する追体験とそれによる反省が生じ、ひいてはこうして働く自己についての反省も生じる。さらに想像がたんなる模像に留まらない表象であることから、系列化と比較を通して新たなものを発見していく可能性が開かれる。ここに表象と真理との間にある可能的なものが現実化されるための形式的な規則もまた探究され、両者の結合条件が検討される。こうした能力論がカントの反省的判断力にまで続く、技術と能力をめぐる思考のひとつの流れを形成しているように思われるのである。

## ギャラント様式と対位法 —18世紀前半におけるその分類の可否をめぐって—

松原 薫  
(東京大学大学院)

本発表では、ギャラントな音楽と対位法がどのような関係において捉えられていたのか、18世紀ドイツ語圏を中心に検討を行う。ギャラント様式の定義についてこれまでに提示されてきた見解は、次の二つに大別される。(1)「ギャラント」という語がもともとフランスで持っていた意味合い——貴族的な作法に則った態度、振る舞い——に即して社会的要素に重点を置いて解釈するもの、(2)ある音楽が備えている特徴、音楽的要素に重点を置いて解釈するもの。いずれの見解をとるにせよ、ギャラントを積極的に推奨したマッテゾンに代表される18世紀前半の著述家は、ギャラントな音楽は流行の趣味に適った心地よい性質を有するものであると考え、これと反対のものとして学術的な様式——具体的には対位法、厳格様式——を念頭に置いていた、と先行研究では論じられている。

しかし、音楽のギャラント性に関する1720年代前後の文献を検討すると、ギャラントな音楽と対位法は必ずしも明確な対立関係にはない。例えばテレマンは1718年の自伝の中で、新旧論争を踏まえて自らを近代人の側に置いており、いわばギャラントの立場を標榜している。確かに同時代の作曲家J. S. バッハと比較すれば、テレマンには対位法による複雑なものよりも、軽快な雰囲気を持ち合わせた作品が多い。だがその一方で、たとえ風刺的な意図を含んでいるにせよ、彼の作品の中には対位法が用いられたものも少なからずある。このように一見矛盾をはらんだテレマンの対位法との向き合い方は、音楽的要素の面ではギャラント様式に当てはまらないが、伝統を踏まえた上でそれを適切な形で創作に生かすという社会的側面においてはギャラント的であると解釈することができる。また、ギャラント性を磨くことの重要性を説いたハイニヒェンの『作曲における通奏低音』では、ギャラント様式とは相容れないはずにもかかわらず、対位法が作曲の基盤であることが指摘されている。

音楽理論においてギャラント様式と厳格様式(対位法)を定式化し、ギャラント様式に對位法が含まれる可能性を排除したのは、18世紀後半の理論家マールブルク、コッホらであった。それより前の時期においては一部の批評家の言説を除いて、ギャラントな音楽と対位法は完全に区別されるものではなく、創作においても理論においても、二つは両立しうるものであったと結論できる。

## 共通論題 (1) 「18 世紀の海の道」

会場 福山市立大学 港町キャンパス 研究棟 1 階 中講義室 A

### 提案の趣旨説明

堀田 誠三  
(福山市立大学)  
高橋 博巳  
(金城学院大学)

福山市立大学で18世紀学会大会の開催をお引き受けすることになり、開催地にふさわしい共通論題として「海の道」を提案した。というのも、大会の開催場所が本学の主要施設が存在する「港町キャンパス」だからである（別に「北本庄キャンパス」がある）。港町というように、本学は瀬戸内海に面しており、この地理的条件に触発されて、「海の道」の発想がうまれた。多島海の景観を眺め、空気がくっきりと澄んだ日には四国までが見渡せ、海は人と人、また人の住む地域を隔てると同時につなぐものでもあることが実感される。

このことは洋の東西をとわず普遍的な事象であり、鉄道が登場する以前には、海上交通が人と文物の交流を支える主要な手段であった。18世紀においても快適かつ迅速な交通手段としては、陸をゆく馬車や徒歩などより、当然ながら海をゆく船のほうが優れていた。共通論題では地域性にとらわれず、知と文化の共鳴と醗酵の基盤という観点から「海の道」を取り上げていきたい。そのさい「海の道」をたどる「航海」と、その発着地ないし経由地としての「港」を考察の対象に入れることも必要であろう。航海中や寄港地での非日常的な強い閑暇は、知的文化的営為への誘因として機能するにちがいないからである。

(以上、堀田 誠三)

18世紀の「海の道」を展望するに先立ち、18世紀から19世紀にかけてこの瀬戸内海を船で往還した人々の目を通して、当時の瀬戸内の風景を再現しておこう。寛政九年（1797）18歳の頼山陽は、叔父頼杏坪に伴われて関東に向かう舟のなかで、「島嶼つゞき、舟帆来去する佳麗の景は、芸備の辺を第一とすべし」（『東遊漫録』）という御国自慢とともに、スケッチをのこしている。スケッチは鞆の浦の手前で終わっているが、ここは朝鮮通信使従事官の李邦彦による「日東第一形勝」、ならびに洪啓禧・啓海父子による「対潮楼」の額で知られた名勝である。明和元年（1764）の通信使をこの港で応接したのは、豊後岡藩の中川修理大夫久貞家中の柴山寛猛たちだった。その後輩にあたる田能村竹田はのちに瀬戸内を往還して、《亦復一楽帖》（天保元年、1830）の〈順風舟行図〉の賛に、「置酒賦詩」、「一千五百里」を「唯兩日」で移動する瀬戸内海航路の快適さを特筆している。そうした船旅の楽しみは《船窓小戯帖》（文政十二年）の〈蛸売り〉の図、ならびにそれを独立させた《売章魚図》に横溢している。ここでの見所は、ふつうの文人画家ならば「銅臭」といって嫌う銭差(コイ)をわざわざ描いていることである。さらに《三津浜図》（天保五年）では、依頼者「酔樵雅契」こと松田渙卿の家のすぐ傍に、賑やかな魚市の競売の場面が描かれ、文人画のなかに平然と経済活動が紛れ込んでいる。奇しくも竹田が訪れる直前に頼杏坪も立ち寄って、「海上争いて立つ玉嶙峋、近くは則ち笑うが如く遠くは則ち顰むがごとし」（「松田渙卿の九霞楼

に登り、見る所を賦して主人に贈る」、『春草堂詩抄』七)と眼前の光景を活写していた。菅茶山もまた、「登登庵の松島詩巻の後に題す」に、「勝を荒陬に尋ねて留まること幾句ぞ。帰り遺る一軸、郷隣を照らす。山陽三万六千島。恨むらくは図を携えて北人に誇らざりしを」(『黄葉夕陽村舎詩』卷六)と云って(享和元年、1801)、多島海の魅力では松島に負けていないと自負している。蕪村の「高麗舟のよらで過ゆく霞かな」(明和六年、1769)の一句は朝鮮通信使船の面影を幻想的に伝えているが、琉球使節やオランダ東インド会社の人々を運んだ船も同様に、北前船などに混じって行き交っていた。

さて共通論題では、ヨーロッパからはバルト海を旅したヘルダーの場合、「海の道」を経て伝わったカトリックの問題、そして朝鮮通信使が伝えた戦争情報、琉球使節が18世紀に有した意味などが様々に論じられる。「海の道」の魅力を再認識するよすがともなれば幸いである。

(以上、高橋 博巳)

## 第1 報告

### ヘルダー『旅日記』(1769)とバルト海

嶋田 洋一郎  
(九州大学)

『旅日記』はヘルダーが1769年5月から7月にかけて行なったバルト海沿岸の都市リガからフランスの港湾都市ナントへの航海の途上で、彼の心の中に呼び起されるさまざまな思想や構想を書き綴った手記であり、そこで言及される主題は芸術や学問、教育、言語、歴史、政治など多岐に及んでいる。本発表では『旅日記』におけるヘルダーの「海上での夢想」(邦訳64頁)の特徴について、その舞台となるバルト海との関連において考察したい。

18世紀における旅といえば「グランドツアー」やゲーテの『イタリア紀行』に見られるような北から南への移動を思い浮かべるが、ヘルダーの1769年の旅は、バルト海を東から西へと移動する旅であった。しかもこれはドイツという観点から歴史的に見れば、ドイツ人によるバルト海沿岸諸都市へのいわゆる「東方植民」とは逆の方向を辿っている。

また『旅日記』の日記としての日付の記入について見るならば、当時はロシア領であったリガで使用されていたユリウス暦が記された後に、18世紀の中頃までにはヨーロッパのほとんどの国で採用されていたグレゴリオ暦が括弧の中に記されている。日付のこうした併記は、当時のヘルダーの時間感覚がまだ東ヨーロッパと西ヨーロッパのあいだを揺れ動いていたことを示している。

しかし『旅日記』において特徴的なのは、「クールラント、プロイセン、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、ユトランド、オランダ、スコットランド、イギリス、ネーデルラント」(邦訳64頁)といったバルト海沿岸諸都市に関するヘルダーの思索が「空と海のあいだを漂う船」(邦訳7頁)で行なわれることによって、固定化されたものから一気に流動化することであろう。そこには19世紀後半以降の国民国家的な思考は見られず、ヨーロッパをキーワードとする啓蒙主義的な知的で多様な交流形態の反映が見られて興味深い。

『旅日記』はドイツ文学史では特に19世紀後半以降の国民文学史記述において、ドイツ独自の文学運動である「シュトルム・ウント・ドラング」の嚆矢をなすものとされてきたが、ヘルダーが若きゲーテにフランスとの国境の都市シュトラースブルクで伝えたと推測される種々の思想は、リガという当時はラトヴィアとドイツとロシアの文化が混雑する港町で生まれ、バルト海での航海途上で「翼と躍動と広大な空間」(邦訳7頁)を与えられて形成されたものであったといえよう。

(邦訳は『ヘルダー旅日記』嶋田洋一郎訳、九州大学出版会、2002年、による。)

## 第2報告

### 韓国と日本におけるカトリック教受容の比較

JUNG Byungseol  
(ソウル大学)

東アジアで最も早くカトリック教に遭遇した国は日本である。スペイン出身のイエズス会神父のフランシスコ・ザビエルが1549年に九州に上陸した。最初、日本側はカトリック教に対して好意的であった。内戦に明け暮れていた大名らは西洋の進んだ武器技術に興味を示し、自分たちの権力を脅かさない限り、宣教師の活動を許した。しかし、カトリック教の勢力が余りにも拡大し、また、その背後に西洋列強があることを知ると、日本では迫害が始まった。鎖国政策下においては、カトリック教は取締りの対象になった。しかし、西洋の科学技術と学問に対する日本側の関心が消えることはなかった。日本に潜入したイタリア人神父のシドッチを尋問した新井白石が、彼より西洋事情を聴取して書き残したのはその一例である。

朝鮮は東アジア諸国のうち、カトリック教が最も遅く紹介された国である。壬辰倭乱（豊臣秀吉の朝鮮侵略）の際に日本軍に従って朝鮮に渡ったスペイン人神父のグレゴリオ・デ・セスペデスに出会った朝鮮人や、日本に連行されてカトリック教徒となった朝鮮人は存在したが、それを以って朝鮮側がカトリック教を受容したと見做すことはできない。17世紀の初めには中国からカトリック教の書籍が輸入され、中国でカトリック教神父に会った人たちもいたが、朝鮮の中にカトリック信仰が芽生えるには至らなかった。

18世紀の末、カトリック教の教理書を読んだ一群の知識人がカトリック教を信仰として受け入れ、朝鮮にカトリック教会が誕生した。信仰が深まると共に指導者が必要になったため、神父の派遣を中国のカトリック教会に要請した。最初の神父であった周文謨が韓半島に入った1795年、すでに朝鮮ではカトリック教を信仰する行為が不法となっていた。カトリック教が儒教の理念を否定し、祖先への祭祀を拒否したことが以前あったので、朝鮮政府はカトリック教に関する更なる調査は無用と判断した。

日本の場合はカトリック教は排斥しても西洋の技術に対する関心は依然として高かったが、朝鮮の場合は西洋の技術にもあまり興味を示さなかった。西洋の技術は中国から幾分受け入れると充分だと思っていた。支配層がそのように考えたので、カトリック教への弾圧も日本と同じく政府レベルで行われた。ただ、日本のように武人が国を統治するのではなく、文人が治める国だったせいも、日本ほど徹底した弾圧は行われなかった。踏み絵を使って信者を確認するような、良心まで捨てる方法は使わなかったのである。

朝鮮のカトリック教については、三つの面において日本との違いが指摘される。朝鮮の人たちによる独学に起因する受容、教理・科学技術を問わず、「西学」なら只管否定する姿勢、そして、以上のような徹底した迫害を乗り越えての、教勢の爆発的な成長がそれです。

### 第3 報告

## 「前帝国主義」の日本における「渡海」言説

KIM Shiduck  
(ソウル大学)

この発表では、1705年に上方で刊行された壬辰戦争文献『朝鮮太平記』の作者・馬場信意（ばばのぶのり）の蝦夷戦争文献群である『義経勲功記』（1712）を取り上げる。特に、加藤清正のオランカイ侵略や、源義経の北高麗渡りをめぐるエピソードが象徴する、「海を渡っての冒険の旅」としての特徴を中心に分析する。

壬辰戦争言説における加藤清正のオランカイ挿話に関しては、様々な議論が行われてきたが、それが『朝鮮太平記』に盛り込まれることはなかった。『朝鮮太平記』所収の挿話は、先行する壬辰戦争文献群の記述に忠実に従っている。馬場信意は、琉球国に関しては、剽窃に近い手法で『異称日本伝』所収の琉球国関連記事を取り入れ、壬辰戦争文献群の諸文献には見られない豊富な内容を『朝鮮太平記』に盛り込んだ。なのに、松前からの漂着民やオランカイのことを述べながら、源義経や蝦夷のことには全く触れない。そして、『朝鮮太平記』の7年後に刊行された『義経勲功記』では義経入夷説を詳細に述べているのである。このような状況から、馬場信意が義経入夷説に関する具体的な情報を入手し、執筆に利用することを決心したのは『朝鮮太平記』（1705年刊）と『義経勲功記』（1712年刊）との間の7年間であったということが推測される。この間には、義経入夷説やシャクシャインの戦いのことを扱った『蝦夷談筆記』（1710）が成立しているが、この種の文献が馬場信意を刺激したのではなかろうか。

一方、『義経勲功記』には北高麗という地域をめぐる議論が一切見当たらない。『義経勲功記』における作者の関心は蝦夷地に止まっており、蝦夷地の背後に広がる北アジア大陸の情勢には無関心であった。日本をしてこの地域の情勢に注目せしめたロシアの南下という事件は、18世紀の初め頃までは、殆どの日本人に知られていなかったことを意味するものと思われる。

## 第4報告

### 琉球国使節渡来の残したもの

横山 學

(ノートルダム清心女子大学)

#### 1. 琉球国使節渡来の成立・「琉球ブーム」

慶長14年(1609)、薩摩藩の「琉球攻め」以後、琉球国は中国との関係を維持しつつ、徳川幕府に対して將軍への賀慶と琉球国王代替わり恩謝の使節を派遣した。江戸時代を通じて、寛永11年(1634)から、嘉永3年(1850)まで18度続いている。

琉球国からの使節渡来は、街道や要港の人びとにとって、準備を要する大きな出来事で、関心を呼んだ。京・大坂・名古屋城下では、人気を当て込んだ出版物が売りだされ、特に天保期(1832~1842)には、「琉球ブーム」が生じた。

#### 2. 瀬戸内海を通航した外国使節

朝鮮通信使と琉球国使節の規模は異なるが、どちらも瀬戸内海を通航した。天保3年(1832)度の琉球国使節については、行列を司る儀衛正の詳しい日記がある。福山市の南に位置する鞆浦には、往路10月12日に着いた。日記から、寄港が天候や風向きに大きく左右されたことが分かる。小松寺には長旅の途中で没した琉球国使者の墓がある。朝鮮通信使の渡来は、文化8年(1811)の対馬で終わる。それ以降、外国からの使節団は琉球国使節のみとなる。通信使の記憶が遠くなるにつれて、街道の人びとにとって、「琉球」と「朝鮮」と違いが分かり難くなった。

#### 3. 近世日本の琉球観と近代の沖縄学

琉球国使節が繰り返し渡来したことによって、近世日本の中に、時間をかけて、琉球に関する情報や知識が蓄積していった。19世紀になると、市民文化の成熟もあり、「琉球ブーム」が起こった。人びとの間に、琉球国への親しさが広く浸透していった。一方で、外国の脅威に緊張した国学者たちは、琉球国を日本の藩屏として論じるようになった。そして、近代を迎えた。「沖縄学」は、「沖縄にこそ古の日本がある」とする思想運動であったともいえる。

朝鮮通信使研究と琉球国使節研究を重ね合わせる作業が進み、理解がさらに深まり、新しい視点が生まれることを楽しみにしている。



## 共通論題 (2) 「啓蒙とフィクション」

会場 福山市立大学 港町キャンパス 研究棟 1階 中講義室 A

### 提案の趣旨説明

齊藤 渉  
(東京大学)

イマヌエル・カントが啓蒙の条件として提起した「理性の公的使用」は、著作を通じて公衆に語りかける著者が「自己自身の理性を用い、自己自身として話す」ことを要件としていた。一方、18世紀には、狭義の文学的テキストはもちろん、文学外テキストにおいても、さまざまなフィクションの使用が確認できる（哲学や科学や政治の問題が、架空の人物同士たちの会話として描かれるなど）。

ジョン・サールの定義によれば、フィクショナルな言説は、著者が主張などの発話行為を行なう「ふりをする」こと、言い換えれば、架空の登場人物や語り手である「ふりをする」ことによって成立する。著者に自己自身として語ることを求めたカントから見れば、それは「理性の公的使用」の埒外にあることになるだろう。だが、だとすると、18世紀に見られる多様なフィクションの使用は、「啓蒙の世紀」にとってイレギュラーなエピソードになってしまうのだろうか。むしろ、この「フィクションの公的使用」は、時代を特徴づける単に偶然的でない現象と見なされるべきではないか。

共通論題「啓蒙とフィクション」では、膨大な数にのぼる18世紀のフィクション使用のうち、いくつかの事例を取り上げ、その理論的考察の枠組みを提示するとともに、それぞれの地域や文脈によるフィクションの機能の多様性を考察する。もとより、可能な事例を網羅的に論ずることは望むべくもないが、そこに見られるいくつかの重要な思想的アスペクトの抽出を目的とした。

はじめに、齊藤渉が、「啓蒙とフィクション」という問題設定の説明をおこなう。報告では、まず久保昭博が、サールやシェフェールなどの代表的著作を取り上げつつ、文学理論の立場から現代におけるフィクション論の主要な問題点を整理する。大崎さやは、ゴルドーニの演劇作品を例に、フィクショナルなテキストと18世紀ヴェネツィアの市民道德の連関を探る。また、隠岐さや香は、科学史の観点から、古典確率論の描く人間像と哲学的フィクションの関係を論じる（ほかもう1名の報告を予定）。

## 第1報告

### フィクション概念をめぐる最近の理論的言説について

久保 昭博  
(関西学院大学)

多様性を示すフィクション使用という観点から18世紀の思想史的な問題を考察するにあたっては、それ自体多義的なフィクション概念のいかなる側面が問題となっているかを明らかにすることが有用だ。そこで本発表では、主としてフランスにおいて近年展開されたフィクション理論の成果を整理しながら、フィクション概念について一定の見通しを得ることを目的とする。

今回、主に取り上げるのは以下二つの著作である。

1) ジャン＝マリー・シェフェール『なぜフィクションか?』(Jean-Marie Schaeffer, *Pourquoi la fiction ?*, Seuil, 1999.)

1999年に出版されて以来、いまや現代におけるフィクション理論にとっては古典ともなった著作である。シェフェールのフィクション理論の要はふたつある。ひとつは「ミメシス」。アリストテレスの伝統に連なる者として自らを位置づけるシェフェールは、『詩学』で提唱されたミメシス概念の再検討を通じて、「ふり」を通じた現実認識—模倣対象を「モデル化」し、それに「没入」することによって獲得される認識—の特性を明らかにした。ふたつめは「遊戯」である。「ふり」は現実的信から自由な「遊戯」である限りでフィクションとなる（さもなくば「虚偽」や「騙し」に陥る）。シェフェールはその成立条件を、ジョン・サールの言語行為論を援用しつつ、当該行為は「ふり」であるという合意が、それに参与する成員全員によって語用論的に形成されているという点に求めた。

2) オリヴィエ・カイラ『フィクションを定義する—小説からチェスまで』(Olivier Caïra, *Définir la fiction - Du roman au jeu d'échecs*, Éditions EHESS, 2011.)

シェフェールは子どもの「ごっこ遊び」をフィクションの原体験と位置づけることによって、近代的な物語文学（すなわち小説）を暗黙の前提としていた従来のフィクション論の地平を大きく広げたが、社会学者であるオリヴィエ・カイラは、一見するとミメシスの問題圏から外れる対象（たとえばチェス）にまで考察の範囲を広げ、フィクション現象のより包括的な理解を試みている。様相論理学や数学なども参照するカイラが本書で光を当てているフィクションの側面は、論理的構築物としてのフィクションである。フィクションが現実的認識を構成する要素であることを認めつつも、「すべてはフィクションである」という汎フィクシオナリズムには陥らないフィクションの定義を提示することによって、本書は現実に根ざしたフィクションのあり方を（再）発見させることに貢献している。

シェフェールのコミュニケーション的なアプローチやそれをさらに拡大したカイラのフィクション論は、フィクションの多様な性質を人類学的な見地から考察するための一助となるだけでなく、18世紀においてフィクションの「公的使用」が可能になる場、いふなればフィクション空間のあり方を考察する視座を提供するだろう。

## 第2報告

### ゴルドーニ作品における「戦争」

大崎 さやの  
(東京大学)

ヴェネツィア出身の劇作家ゴルドーニは、当時のイタリア演劇を改革した人物として知られる。彼は1750年に、いわゆる演劇改革宣言を行い、リアリズムの方向に向かうことを宣言する。彼の代表的喜劇の多くは、市井の人々の日常生活を写實的に描写するものだが、そのため彼の作品は、どちらかというとなりやかなイメージを与えることが多い。だがいっぽうで、彼の作品では、戦争や軍人といったテーマもしばしば取り上げられている。

まず、彼の戦争体験を語ったものとして、1787年出版の彼の『回想録*Mémoires*』が挙げられる。後年のパリ移住を最たるものとして、ゴルドーニは移動の多い人生を送ったが、若い頃にはミラノに住み、ヴェネツィア共和国公使の秘書をしていた時代もあった。彼はこの時、1733年から1734年にかけて、イタリアも戦場として展開された、ポーランド継承戦争を体験している。『回想録』では、3章にわたり、当時の戦争の記憶を振り返っている。

さらにゴルドーニの劇作品を見てみると、軍人を扱った代表的な喜劇として、彼が演劇改革宣言を行った1750年に書かれた、『軍人の恋人*L'amante militare*』が挙げられる。また、後にモーツァルトがコルテッリーニの改作による台本に作曲することになる、1764年初演のオペラ・ブッフファ『愚か娘になりすまし*La finta semplice*』も、軍人が登場するオペラとして知られるものである。だが、彼の戦争体験が直接的に反映された作品として挙げられるのは、1744年初演のインテルメッツォ『幸運な兵舎*Il quartiere fortunato*』と、1760年初演の喜劇『戦争*La guerra*』である。『幸運な兵舎』は、彼が1734年に目撃した、パルマでの戦闘がもととなった作品である。いっぽう『戦争』は、ミラノで目撃した、フランス＝サルデーニャ連合軍による、ハプスブルク支配下のミラノ城攻略をモデルに書かれたとされている。

西欧では、トロイア戦争に始まり、多くの戦争が、さまざまな芸術作品で取り上げられてきた。ゴルドーニは、回想録と喜劇、音楽劇のそれぞれジャンルで、戦争を扱った訳だが、ではこうしたジャンルによる、戦争の描かれ方に違いはあるのだろうか。本発表では、戦争に関連するゴルドーニ作品を取り上げ、彼の戦争に対する考えを探ると同時に、彼の作品において、戦争がどのような機能を持っていたか、フィクションの観点から読み解いていきたい。

### 第3報告

## 古典確率論の描く人間像と哲学的フィクションの関係

隠岐 さや香  
(広島大学)

検閲から逃れて政治風刺や社会批判、道徳的な議論等を行うにあたり16-18世紀の欧州においては哲学的フィクション、すなわち英語圏ではphilosophical fiction、仏語圏ではconte philosophiqueなどと今日では分類されるジャンルが出現した。ヴォルテールの『カンディード』はその典型とされている。ところで、この時期は自然科学の領域に於いても科学論文の文体が確立していく時期であり、科学とフィクションの関係を扱う先行研究も存在する。本発表では、確率論論文、それも特に道徳算術 (arithmétique morale) や社会数学 (mathématique sociale) と呼ばれた領域を扱うテキストに着目し、哲学的フィクションとの類縁性、および差異について論じたい。これらの領域は今で言う社会科学と心理学の双方を組み合わせたようなものであり、具体的には人口学的な問題や人間の意思決定、法や経済の関わる費用便益分析などの問題に確率論を適用することを行っていた。たとえば、ベルヌーイ家のニコラスやダニエル、G.L.ビュフォンやダランベール、コンドルセ侯爵、ピエール・シモン・ラプラスといった学者達がこれらの問題に関わった。特に有名なのはラプラスであり、彼の時点までに集大成された確率論の体系は古典確率論と読ばれている。だが数学史的視点からの研究で見過ごされがちなのは、他の応用的な数学の使用法と比較しても、古典確率論が「人間」の思考と行動という物語的な想像力と解釈力を要する分野であったという事実である。特に道徳算術や社会数学においては、人間の理性的な行動の基準を問うことが目的とされていたため、賭け事の損得や、人間の平常心の問題、議会の投票問題、更には人の生き死になど、いわゆる科学論文にはみられない物語的とすらいえるような設定が盛り込まれる傾向があったのである。このような問題設定は時に哲学的フィクションとも接近した議論を巻き起こし、現代的な表現でいえば、個人の内面世界と外界との関係や、現実に生じた事象と人間の認知能力の関係などを問うことにもつながっていった。本発表では、このような事例の紹介を通じて、啓蒙の世紀において科学とフィクションの想像力がどのように接続する回路を有していたのかを考察していきたい。

## 第4報告

### 名誉革命とフィクション：ダニエル・デフォーの場合

武田 将明  
(東京大学)

イアン・ワットの『小説の勃興』(1957)以来、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)は近代小説史における先駆的な作品として重要な地位を与えられている。また、ロンドンの商人の家に生まれた非国教徒であるデフォーを中産階級の象徴と見なすことも常識となっている。このとき、重要な歴史的背景として挙げられるのが名誉革命(1688-89)である。名誉革命後のイングランドでは、中産階級の台頭、ジャーナリズムの発展、ロック以降の経験主義哲学といった各方面での近代化が進んだ。こうした時代精神を体現する人物および作品としてデフォーと『ロビンソン・クルーソー』は注目されてきた。もちろん、こうした位置づけの偏りを批判する論調も存在するが、ワット的な読みを完全に覆すものではない。

本発表は、デフォーと名誉革命とのつながりを疑うのではなく、従来の研究における両者の関係の捉え方に批判を試みる。そこには、時代精神の反映という観念的な語彙では説明できない、ごく具体的な影響関係が見られるのではないか。デフォーの政治パンフレットはしばしば名誉革命を正当化し、当時の政体を根拠づけようとする。彼は様々な人物と論争を繰り広げるが、この文脈で特に重要なのはジャコバイトのチャールズ・レズリー(1650-1722)である。レズリーの奉じるフィルマー流の王権神授説を批判するなかで、デフォーは政治批評におけるフィクションの効用を見出している。本発表では、特にデフォーが王権神授説に対抗して書いた長篇詩『神の掟によりて』(1706)におけるフィクションの役割を分析する。この作品では、神意(Providence)がフィクションとして導入されることで、ある出来事を真実として特権化している。しかしながら、神意の問題をより深く追究した道德指南書『家庭の導き』(1715)では、神意の名の下に墮落した家族を改心させようとする父親の試みは失敗し、むしろこの父に反抗する息子の悲劇にこそ神意が宿るように見える。

『家庭の導き』の四年後に出版された『ロビンソン・クルーソー』では、『神の掟によりて』よりも遥かに説得力のある書き方で、さらに『家庭の導き』の失敗を繰り返すことなく、神意という名のフィクションが出来事の真実性を高めている。名誉革命という、それ自体がフィクション的な革命を根拠づけるなかでデフォーが見出したフィクションの実用的な価値が、結果的に『ロビンソン・クルーソー』という新たな散文フィクションを生み出した過程を追うことにより、近代小説と政治との関係に従来とは異なる角度から光を当てたいと思う。

2014年4月 発行

## 日本18世紀学会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局  
e-mail: [jsecs.nagoya.uni@gmail.com](mailto:jsecs.nagoya.uni@gmail.com)  
tel: 052-789-2380  
fax: 052-789-4924  
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>